医師会長エッセイ

ポラリスを仰ぐ北の大地から

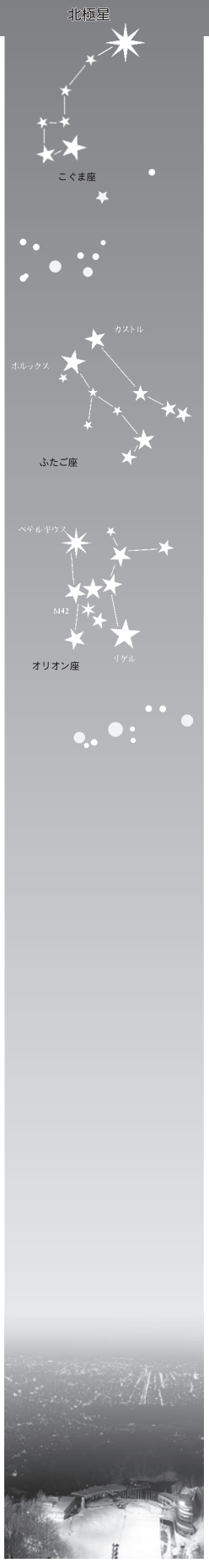
流氷と網走

網走医師会 会長　後藤田明彦（ごとうだあきひこ）

今年２月15日網走は「流氷初日」を迎えた。陸上から初めて流氷が確認された日である。1946年の観測開始以来、最も遅い「流氷初日」とのことで１週間前の２月８日、流氷のみられない「第60回あばしりオホーツク流氷祭り」が開催された。小学生のころ冬休みに入る前、「流氷に乗って遊ばないこと」と学校で注意された記憶がある。調べてみると1960年代から70年代、最も早い流氷初日は12月31日、接岸初日は１月９日であった。冬休みが終わる１月中旬頃までには流氷は接岸していたようである。

当時から２月の「流氷祭り」の頃には、流氷目当てに多くの観光客が訪れていた。国内からの家族連れや、大きなリュックを背負った大学生などの若者が多かったが、外国人の姿は珍しかった。最近は流氷の訪れとともに、キャリーケースを引きずりながらバス乗り場や流氷観光船乗り場に向かう観光客が増加している。その多くは中国、台湾などからの旅行者で、駅前のビジネスホテルでは宿泊者の９割が中国人の日もあったようだ。雪道に慣れていない外国人の転倒事故や発熱者の来院も増加し、スマートフォンの翻訳アプリを駆使しながら診療している。

３月下旬の終業式の頃には流氷の離岸、「海明け」を迎え、やはり流氷に乗って遊ばないよう注意された。実際に流氷に乗って沖へ流される事故もあった。当時の「海明け」の日も調べてみると、やはり３月中旬から４月の初めが多かった。最近は２月末から３月上旬に「海明け」を迎えることが多くなった。この原稿を書いている３月12日、流氷帯は遙か沖合に去っており、観光客の姿もまばらとなっている。海水温の上昇に伴い海氷の量は減少傾向にあるとのことで、ここ網走でも流氷が見られる期間は短くなってきている。将来、流氷のない冬が来るかもしれない。新たな観光資源になるものを考えていかなければならないのだろうか。



医療現場の危機的状況と将来への提言

札幌医科大学医師会 会長　渡辺敦（わたなべあつし）

医療現場が直面する課題は多岐に亘るが、それぞれの課題に対して適切な対策を講じることで、より良い医療サービスを提供できる環境を整えることが求められている。

現在、医療現場では人口減少、受診企図閾値の上昇、入院期間短縮などによる絶対的患者数減少という問題に直面している。さらに、医療の高度化に伴う医療費の増加、光熱水費の高止まり、働き方改革・人事院勧告の影響による人件費の増加、物価高騰に伴う業務委託費の増加や老朽化が進む施設への投資、など医療に要する支出が著しく増加している。病院医療が崩壊しつつある状況の中で日本病院会会長の相澤孝夫先生は「東京大空襲後の焼け野原状態になって、病院がほとんどないという状況になったら、皆がようやく慌て、グランドデザインを考えることになるのでしょう。そこまでは放っておきたいのですね」と国に警鐘を鳴らしている。

さらに、国立大学病院長会議会長の千葉大学医学部附属病院長大鳥精司先生の緊急提言によると、42国立大学病院中32病院が赤字を計上し、その赤字総額は235億円に達しており、国立大学病院自体も消滅する危機が迫っていると発言している。

当施設も例外ではなく、多額の赤字を抱えている。当施設における不適切な部分の改善は迅速に行っているものの、それだけでは決して追いつかない厳しい収支状況でとなっている。独立法人化されてはいるものの、人的にも機器設備などへも先行投資が困難な状況であり、高度先進医療の提供がままならなくなる状況に陥っている。

このような状況を鑑み、診療報酬の適正化や保険制度の再構築など、医療制度の根本的な変更が必要な時期に来ているのではないか。医療の質を維持しつつ、持続可能なシステムを構築するためには、国や自治体の積極的な関与と制度改革が求められている。